

仙台宗教音楽合唱団

feat.

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

ヨハネ受難曲

第二稿

BWV245

1725 Ver.

Johann Sebastian Bach Johannespassion

J.S.バッハ作曲 「ヨハネ受難曲(第二稿)」BWV245 (1725Ver.)

第40回

演奏会

2025 年

4月26日(土) 14時

日立システムズホール仙台

コンサートホール

Program



ロ

Johannespassion BWV245 Ver. II (1725)

ヨハネ受難曲 第二稿

Johann Sebastian Bach

ヨハン・セバスチャン・バッハ 作曲

プ

第 1 部 (Parte prima)

第 1 曲～第 14 曲

[演奏時間 約 40 分]

—— 休憩 (20 分) ——

第 2 部 (Parte seconda)

第 15 曲～第 40 曲

[演奏時間 約 80 分]

指 揮 佐々木 正 利

副 指 揮 渡 辺 修 身

合 唱 仙台宗教音楽合唱団
feat. 盛岡バッハ・カンタータ・フェライン

独 唱
福音史家 伊 藤 陽 平
イエス 田 中 雅 史
ピラト 鈴 木 集
バスアリアとペテロ

荒 井 涉 吾
ソプラノアリアと端女

今 野 沙知恵
アルトアリア 在 原 泉

テノールアリアと下僕

我 妻 健 太
バスアリア 及 川 泰 生

管 弦 楽 仙台宗教音楽アンサンブル

コンサートミストレス 神 谷 未 穂

オーボエ 小 畑 善 昭、岡 北 斗
フルート 阿 部 博 光、櫻 井 希
ファゴット 西 口 真 央
ヴァイオリン1 神 谷 未 穂、ネストル・ロドリゲス、

平 松 典 子、須 藤 遥、
松 山 古 流

ヴァイオリン2 川 又 明日香、木 越 直 彦、
浅 野 裕里香、小 野 英 駿

ヴィオラ 成 田 寛、梅 田 昌 子、
柴生田 桂 子

ヴァイラダガンバ 田 崎 瑞 博
チェロ 三 宅 進 (通奏低音)

八 島 珠 子
コントラバス 田 中 洸太郎

オルガン 渡 辺 真 理
チェンバロ 平 野 智 美

第 40 回演奏会に寄せて

仙台宗教音楽合唱団
 委員長 北 岡 倫 典

本日は当団演奏会にご来場いただき誠に有り難うございます。今回の演奏会は、数えまして第 40 回目となります。この記念すべき演奏会に、長い間活動の中心として取り組んできた J. S. バッハの代表作の一つ、ヨハネ受難曲（第二稿 1725Ver.）を披露できますことを大変嬉しく思っております。どうぞ最後までごゆっくりとお聴き下さい。

私どもでは昨年 4 月に、実に 6 年ぶりとなる第 39 回の演奏会をおこなうことができました。コロナ禍を経ての久しぶりのお客様の前での演奏に、心から喜びを感じました。その一方、演奏やマネジメントについては、前回演奏会（2018 年）より間隔が開き過ぎてコロナや他の要因で団員の数が減少した為、戸惑うことや困難なこともいくつかありました。それらの反省を次回への教訓として活かそうと考えていた矢先、たまたま本日のホールをお借りすることができ（最近はその分野での活動が活発になり、ホールの抽選も狭き門となっています・・・）、1 年を待たずに演奏会が出来るチャンスが訪れました。もう少し練習や準備に時間があればとも感じましたが、演奏会が開催できることへのモチベーションは確かに大きなものがありました。具体的な目標を前にして団員それぞれの意識も高まり、また嬉しいことに“佐々木正利先生の下でヨハネ受難曲を歌う”のアナウンスをきっかけに、以前一緒に歌っていた多くの仲間が集まってくれました。

そして今回は、以前より交流があり同じ佐々木先生の指導の下で研鑽を積まれている盛岡バッハ・カンタータ・フェラインと力をあわせ、同じプログラムの演奏会を各々の地、仙台と盛岡でおこないます。それぞれに練習を重ねてきましたが、お互いの練習に行き来をし、マネジメントにおいても協力し合いながら準備を進めて参りました。佐々木先生の求める音楽、曲に対する思いを何とか伝えたいという気持ちは一緒です。二つの団の声が溶け合い、皆さまの心に響く演奏となれればと願っております。

また今回も、仙台宗教音楽アンサンブルとして 23 名もの管弦楽の皆さまにお集まりいただきました。昨年より更に厚みが増した名手の奏でる美しい響き、アンサンブルの妙をお楽しみください。独唱の皆さまについては、受難曲という、キャラクターとしての表現を求められる技術的にも難しい作品に対し、将来を嘱望され、実力のある若手の方々にお集まり戴きました。果敢なアプローチで音楽を奏でてくれるものと、私たちの胸も高鳴ります。

58 年前、教会での祈りの音楽を捧げようと始まりましたこの合唱団は、昨年天に召された故佐藤泰平先生から東海林（鈴木）優子先生、そして佐々木正利先生のご指導に受け継がれ、時代と共に演奏会を続けることが出来ました。これまでの活動をお支え頂いた、また見守ってくださった皆さまに改めて深く感謝をいたします。来年には震災 15 周年、再来年には創団 60 周年を迎え、併せて佐々木先生の指揮者就任 45 周年を迎えることとなります。

これからも、皆さまの変わらぬご理解とご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

ごあいさつ

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン
代表 茂木 容子

ご来場の皆さま、本日はヨハネ受難曲第二稿演奏会にご来場いただき、心より御礼申し上げます。

私たちは、佐々木正利先生のもとこれまで48年間、バッハを幹として様々な音楽を演奏してまいりました。一言で言うと、「バッハを愛する仲間たち」です。これまでだいたい1年に1度くらいの演奏会を開催してきて、そのひとつひとつの思い出は尽きませんが、ひとつ挙げるとすれば、昨年6月のドイツはライプツィヒ市で行われた「バッハ音楽祭」で歌ったことです。ライプツィヒは、バッハがその人生最後の教会音楽監督（カンツール）として仕事をして、たくさんのカンタータを作曲した街です。その街が、音楽祭に集ったバッハの愛好家、演奏家、合唱団の熱気に満ちていました。その雰囲気を感じつつ、大きな教会のバルコニーでのリハーサル、初対面の指揮者、オーケストラとの緊張の中での音出し、ここから、私たちの夢の時間が始まったのでした。バッハを共通言語とする人々との時間は貴重なもので、今までの活動、これからの活動に確信を与えてくれるものでした。

さて、コロナ禍は合唱活動にも影を落としました。バッハ音楽祭への招待は2020年6月が1回目、これは海外へはおろか、県外への移動も不自由で断念。2022年にもご招待いただきましたが、海外渡航への不自由、練習準備不足でお断りした経緯がありました。まさか3回目があるとは思わず、ご招待いただいた時には本当に嬉しかったのですが、単独での企画は不安の残るものでした。佐々木先生からのご提案で、本日ご一緒する仙台宗教音楽合唱団の他、同じく佐々木先生のご指導を受ける山響アマデウスコア、東京21合唱団他にお声がけし、58名の合唱団で参加することができたのでした。

本日演奏するヨハネ受難曲は、私たちの演奏歴の中で4回という一番回数を重ねたプログラムです。

1回目は、1985年バッハ生誕300年記念と銘打ち、佐々木先生が指揮と福音史家を兼任でのアグレッシブな演奏会となりました。仙台宗教音楽合唱団との共催であり、盛岡、仙台での2公演でした。2回目は、2007年、故ヘルムート・ヴィンシャーマン先生の指揮による演奏会になります。マエストロのタクトから目が離せず、非常に集中して歌っていたことを覚えていています。私たちのことを「ファミリー」と言ってくださったマエストロは、打ち上げの席で「この～ヨハネ受難曲～最終曲のコラールを私のお葬式で歌って欲しい」と発言し、皆の感激の涙を誘ったのでした。3回目は、私たちの合唱団創立40周年にあたる2017年、佐々木先生の指揮による第四稿の演奏会でした。幾多の優秀な声楽家を育てた佐々木先生が、選りすぐりのお弟子さんたちをソリストに起用して下さいました。そのメンバー全てが盛岡にルーツを持つ方々でありました。

そしてこのたびの4回目、盟友である仙台宗教音楽合唱団とともに第二稿を歌います。

仙台宗教音楽合唱団は、数々の演奏会で共に活動してまいりました兄弟のような存在で、佐々木先生のもと、切磋琢磨し、補い合い、高みを目指そうと同じ志を持った仲間です。

仙台宗教音楽合唱団の第40回という記念すべき演奏会になることをお祝いし、これからも、ともに前に進んでいきたいと心より願っております。バッハと共に過ごせる毎日に感謝しつつ。



《ヨハネ受難曲》「第二稿」鑑賞の手引き



盛岡バッハ・カンタータ・フェライン
コンサートマスター 佐々木幹雄

本日はJ.S. バッハ（1685-1750）がドイツのライプツィヒ市において1725年3月30日に実際に演奏した記録の残る《ヨハネ受難曲》の「第二稿」をお聴きいただきます。2時間ほどかかる大曲で歌詞はドイツ語ですが、舞台に日本語の字幕が出ますので、イエスの「受難」の物語やそこに登場する人物たちの心情を想像しながら、バッハの音楽の世界をご体験ください。以下は、本作品の鑑賞の手引きです。必要に応じてお読みいただき参考にいただければ幸いです。

○「受難」とは … 神による救いであり預言の成就です

「受難」とは、神の子であるイエスが捕らえられ、十字架につけられ、殺されたことを言います。世界の創造主である神が人間を救うために御子イエスをこの世に遣わし、この罪なきイエスが人間の罪を全て背負って人間の身代わりとなって死ぬ、このことは人間を罪から救う神の恵みであり恩寵であるとキリスト教では考えられています。また同時に、ユダヤ教の聖典であった旧約聖書の預言が成就することでもあります。

○「受難『曲』」とは … 信仰心を高めるためのメディアです

キリスト教において、神の計画の通りにイエスが磔になり死ぬことはとても重要なことです。ですから、聖書に書かれ伝えられてきたその出来事を教会に集う信徒に伝えて信仰心を高めようとしたり、聖書にある受難の記事を朗読したり説教により解説したりしてきました。そのために様々なメディアを利用しました。教会に飾られる宗教画やステンドグラス、タペストリーなども同じ目的をもったメディアと言えます。そして音楽というメディアを使って人々に伝えようとしたのが、受難曲です（ちなみに「受難劇」というメディアもあります）。

中世には受難に関する聖書の文言が助祭によって朗読されていました。13世紀になると会話文などを分担して朗読されるようになり、このころから地の文を担当する福音史家（エヴァンゲリスト）の役割が登場します。その後数世紀を経て、ルター派教会ではJ. ヴァルター（1496-1570）やH. シュッツ（1585-1672）により音楽としての受難曲が発達し、18世紀のバッハに見られるような「オラトリオ風受難曲」の形式へとたどり着きました。

受難曲は1年に1回、教会暦の聖金曜日（例えば1725年は3月30日、2025年は4月18日）の礼拝でイエスの受難についての説教が行われ、その説教の前後（「第1部」は説教の前、「第2部」は説教後）に演奏されました。バッハが演奏したライプツィヒの町では聖トーマス教会と聖ニコライ教会で年ごとに交互に演奏されており、今回の「第二稿」が演奏されたのは聖トーマス教会でした。

○物語のあらすじ

今から二千年ほど前、イスラエルのエルサレムという町の近辺での出来事で、主に『ヨハネによる福音書』の第18章から19章までに記されている事柄です。



まず**第1部**です。初めはキドロン谷の向こうの園に、弟子のユダを含むローマの兵士たちなどの一団が訪れ、イエスを逮捕します(新バッハ全集による番号付けによると第2～5曲。以下同じ)。イエスが連れて行かれた先は大祭司ハンナの邸宅。そこでイエスはハンナに尋問を受けます(第6～11+曲)。その間、師であるイエスを外で待っていた弟子のペテロは師の予言通りイエスを「知らない」と3度否認してしまい、自らの信仰の弱さを悔やみます(第10～14曲)。

続いて**第2部**です。場所はローマから派遣された総督ピラトの官邸です。官邸内では連行されたイエスがピラトの尋問を受けます。ピラトを取り巻くローマの兵士たちも登場しイエスを辱めます。官邸の前ではピラトとユダヤ人たちの問答が行われ、それによってイエスの刑が十字架による磔刑へと決まっていきます(第15～23曲)。最後はゴルゴタの丘が舞台です。十字架に磔にされたイエスとそれを取り巻く兵士たち、それから母マリアらとの会話、そして死を迎え、埋葬されます(第23～38曲)。

○音楽の特徴

説教で語られる受難の意味を、音楽を通して信徒の心に届けようとしたのでしょう、バッハは様々な工夫をしています。あたかも目の前で受難の物語が進行しているかのように、言葉や雰囲気合致した音楽づけをしたり、歌い手に役割を分担して演劇性を高めたり、物語に寄り添う信者の心情を代弁するようにアリアやコラール(後述)などの楽曲を挿入したり…。また『ヨハネによる福音書』が説く受難の意味、すなわち神と人間との仲立ちとしてのイエスの存在やその象徴としての十字架の価値を鋭く読み取って、全体の楽曲構成や歌詞、音楽に反映させたりもしています。

歌われる楽曲はたくさんあるのですが(新バッハ全集の番号付けによれば全部で40曲)、それらの歌詞(テキスト)には3つの種類があります。

まず、**聖句**と呼ばれるもので、聖書の言葉そのもので受難の物語の記事です。物語の進行役としていわゆる「地の文」を語るのが福音史家(エヴァンゲリスト)です。テノールの朗唱(レクタティーヴォ)が基本です。また、登場人物であるイエスやピラトなどの言葉(会話文)はそれぞれの独唱者が担当します。下役のユダヤ人たちや兵士、祭司長など群衆の言葉は合唱が担当します。叫ぶユダヤ人たちの合唱などは群衆らしくポリフォニック【註1】に作曲されています。

次に、**自由詩**と呼ばれるもので、物語の進行を受けて、その物語を見ている(聴いている)人の心情を象徴、あるいは代弁するものです。物語の途中に挿入され、多くはアリアやアリオート【註2】として、独唱者により感情に訴えるように音楽性豊かに歌われます。終曲前の第39曲は合唱で歌われます。

最後に、**コラール**と呼ばれるもので、ドイツのルター派教会の会衆讃美歌です。これも物語の進行を受けてところどころに挿入されます。教会に集った信徒たちの、それぞれの場面での気持ちを代弁するものです。また、物語は過去の出来事としてとらえられますが、コラールによって聞き手には受難の物語に「私たちはどうなのか」と現代的な価値づけが求められます。さらに、



同じ旋律の讃美歌ながら和音づけが異なっているものもいくつかあります。音楽的な統一感をもたせながら歌詞に応じた音楽づけをするというバッハの真骨頂とも言えます。

楽曲構成の上での工夫の代表的なものは第2部冒頭のコーラルに続く場面にあります。ピラトによる尋問が始まった場面からゴルゴタの丘で十字架につけられる場面までの間が、「神の子よ、あなたが捕らわれたことで」のコーラル（第22曲）を中心にして、その前後にレチタティーヴォやコーラル、アリア、合唱などの曲種が**対称的（シンメトリー）**【註3】に配置されていることです。この構成によってその中心のコーラルの位置づけを高め、『ヨハネによる福音書』が最も重きを置く「神と人間との仲立ちとしてのイエスの存在」、「イエスこそが救い主（キリスト）である」という点をひととき強調し、バッハはそのことを核心としたと考えられています。

その他にも、アリアの形式において当時一般的であったダ・カーポ形式を崩したり、アリアごとに多彩なオブリガート楽器【註4】を選択したり、音楽の随所に情念を表現する「フィギュール」【註5】と呼ばれる音型などの修辭的技法が用いられていたり、《ヨハネ受難曲》はバッハの音楽の特長が満載です。

○「第二稿」の特徴と価値

ドイツのライプツィヒ市の教会の音楽を司るトーマス・カントルという役職に1723年5月から就いたバッハは市にある4つの教会のためにたくさんの音楽をつくりました。その職務の中には毎週の礼拝のためのカンタータの作曲に加え、特別の機会にはそれに応じた楽曲をつくることも含まれていて、教会暦における聖金曜日には隔年で聖トーマス教会と聖ニコライ教会で受難曲を演奏することになっていました。バッハはライプツィヒで初めて迎える1724年4月7日の聖金曜日の礼拝用として、《ヨハネ受難曲》を作曲しました（「第一稿」、聖ニコライ教会で演奏。オリジナルな楽譜は不完全にしか残っていません）。

翌年の聖金曜日の1725年3月30日には、聖トーマス教会で《ヨハネ受難曲》を演奏しましたが、この日に向けてバッハは前年に作った「第一稿」のいくつかの部分新しい曲に入れ替えてまとめました。これを「第二稿」と呼んでいます。

特徴は、「第一稿」に比してコーラルが重視されている点にあります。大きなドラマの冒頭はコーラル旋律をもとにした壮大な合唱曲（後に、マタイ受難曲に転用）で始まり、ドラマの最後を締め括るのも「神の子羊（ラテン語では"Agnus Dei"）」のコーラルを使った合唱曲です。ライプツィヒに赴任した2年目にあたる1724年6月から1725年3月までのシーズンに、バッハは40回ほどの礼拝のためのカンタータを「コーラル・カンタータ」のスタイルで統一して作曲しました。

「コーラル・カンタータ」とは、コーラルの歌詞や旋律を、1つのカンタータに含まれる数曲に同じコーラルの旋律や歌詞を使用することで統一感が保たれるようなカンタータのことです。このスタイルで毎週のカンタータを作曲し演奏しているシーズンにあって、聖金曜日という特別な機会に上演される受難曲も同様のスタイルにしようと改訂した点に、バッハのコーラルに寄せる思いが感じられます。



ちなみにバッハは、生涯に《ヨハネ受難曲》を少なくとも4回演奏したと考えられています。初めは1724年、翌年（1725年）には大幅に改訂して「第二稿」、1732年「第三稿」、1749年「第四稿」です。それとは別にバッハ自身が決定稿をまとめるべく1739年から作業を~~費~~^費始めましたが、途中で終わっている「総譜稿」と呼ばれる稿が残されています。この「総譜稿」は1985年（「バッハ生誕300年記念演奏会」指揮：佐々木正利、盛岡・仙台にて）と2002年（指揮：佐々木正利、仙台にて）および2007年（指揮：H. ヴィンシャーマン、盛岡にて）に、「第四稿」は2017年（指揮：佐々木正利、盛岡にて）に私たちは演奏しています。

今日的な演奏の歴史の面から見てみると、「総譜稿」がこれまで主に演奏されてきました。この稿はバッハが生前に「最終稿」としてまとめあげようとしたけれども途中で終~~鑑~~^鑑ってしまった稿をもとに1970年代に新バッハ協会により編纂されたものでした。それが作曲者の音楽的な意図を最も良く表しているものと当時は考えられてきたからです。

一方、これはバッハによって実際に演奏された《ヨハネ受難曲》ではありませんでした。21世紀になり音楽学の研究も進み、後世の校訂者によって「最終稿」としてまとめられた作品とはまた違った意味で、バッハによって実際にライブツィヒの聖トーマス教会で（ちょうど300年前に）演奏された記録が残る《ヨハネ受難曲》「第二稿」を取り上げて演奏することの興味、そして価値は高まっていると考えています。

1950年のバッハ没後200年を記念する事業の際に発刊された小エッセー集の中で、M.J. ナウマンは次のように書いているそうです。

「私たちはルターの説教を聞くことはできない。私たちは、過去の栄光ある偉大な説教者たちの説教を読むように、彼の説教を読むのみである。しかしながら、私たちはバッハの説教を聴くことができる。彼以外の偉大な音楽家の作品は私たちに語りかけるが、バッハの作品は私たちに説教するのである。」（Martin J. Naumann、H.Lilje、"Bach als musikalischer Prediger der Lehre Luthers," 1953年 荒井章三訳）

ちょうど300年前にバッハによって実際に演奏され、ドイツの教会に響いたであろう《ヨハネ受難曲》「第二稿」による説教を、本日じっくりとご体験ください。

註

- 1 ポリフォニック……………「多声的」の意。各パートが同時進行的に同じリズムで進むのではなく、一つのテーマが声部ごとにずれながら展開するような音楽のスタイル。
- 2 アリオース …………… 器楽伴奏付きの朗誦（レチタティーヴォ）。
- 3 対照的（シンメトリー）… 合唱→レチタティーヴォ→《第22曲コラール》→レチタティーヴォ→合唱…といったように、このコラールの前後で楽曲の配置が対照的に配置されているということ。
- 4 オブリガート楽器 …………… 主旋律と競うように演奏される旋律的な伴奏の楽器
- 5 フィグール …………… 特別な音の使い方あるいは音型の定型を使うことで、それぞれがある情念や事柄を象徴するとされていた。



伊藤 陽平 ITO Yohei / 福音史家（テノール）

岩手大学教育学部学校教育教員養成課程卒業。同大学院教育学研究科修了。声楽を佐々木正利氏に師事。大学院修了時におけるシューマン歌曲集『詩人の恋』の演奏は秀逸で、折しも来盛していた東京藝大教授をして、藝大大学院を凌駕する感動的なドイツリートと唸らせた。その音楽センスと確かなドイツ語ディク션을駆使して、これまでにシュッツ『ヨハネ受難曲』『音楽による葬送曲』の福音史家、ブラームスの『ジプシーの歌』をはじめ、ドイツ音楽へのアプローチは比類なきものと絶賛され、その確かな様式感と技術により、バッハ『マニフィカト』、モーツァルト『レクイエム』等々のソロを務め好評を博している。来年3月、すみだトリフォニーホール（東京）において『マタイ受難曲』福音史家としてもデビュー予定。現在、岩手県の中学校教諭として勤務する傍ら、テノール歌手、また合唱指導者として将来を嘱望されている。



Ayane Shindo

田中 雅史 TANAKA Masafumi / イエス（バリトン）

岩手大学教育学部芸術文化課程卒業。東京藝術大学大学院修士課程声楽専攻を首席修了。併せて大学院アカンサス音楽賞、小川尚子賞海外派遣奨学金を受賞。ウィーンにて短期研修を積む。令和2、3年度公益財団法人野村学芸財団奨学生。第34回奏楽堂日本歌曲コンクール歌唱部門第1位、中田喜直賞、木下記念賞（金メダル）受賞。第93回日本音楽コンクール声楽部門（歌曲）第3位受賞。これまでに《第九》、《メサイア》、《ドイツ・レクイエム》、《宗教カンタータ》等でソリストを務める。オペラでは5月、新国立劇場主催公演《小さな煙突掃除》ボブ・トム役にてデビュー予定。2025年よりバッハ・コレギウム・ジャパン声楽メンバー。



鈴木 集 SUZUKI Tsudoi / ピラト（バス）

山形県鶴岡市出身。山形大学、同大学院修了。山形県生涯学習文化財団鑑賞普及事業「魔笛」パパゲーノ、仙台オペラ協会「ドン・ジョヴァンニ」標題役客演他、「ドン・パスクアーレ」マラテスタ役、「メリー・ウィドウ」ダニロ伯爵役等出演。山形交響楽団第282回定期演奏会ブルックナーミサ曲第3番をはじめカルミナ・ブラーナ、上田益作曲レクイエム、イタリアマドリガーレ、バッハ作曲カンタータ等ソリストを務める。藤原歌劇団準団員。山形オペラ協会会員。アポロ音楽院声楽講師。山響アマデウスコアコンサートマスター。Cantores Polarisメンバー。女声合唱団ささゆり、上山混声合唱団フロイデ、山形大学混声合唱団、RHEINBERGER Chor Nagai 各指導・指揮。



荒井 渉吾 ARAI Shogo / アリアとペテロ（バス）

宮城県名取市出身。宮城県仙台南高等学校、岩手大学教育学部芸術文化課程音楽コース、東京藝術大学音楽学部声楽科を卒業。二期会オペラ研修所マスタークラス修了。予科修了時に奨励賞を受賞。《コジ・ファン・トゥッテ》グリエルモ、《リタ》ガスパロ、《ラ・ボエーム》マルチェッロ、《電話》ベンなどで出演。また声楽分野を中心に創作活動も行っており、これまでに自作曲の発表のほか、合唱編曲の依頼を受け数多く手掛けている。声楽を松尾英章、佐々木正利、萩原潤、佐野正一の各氏に師事。二期会準会員、おはなしきいたりいな団員。



今野 沙知恵 KONNO Sachie / アリアと端女 (ソプラノ)

仙台市出身。桐朋学園大学音楽学部声楽専攻を首席で卒業、同大学研究科を修了。新国立劇場オペラ研修所第14期修了。文化庁新進芸術家海外研修生。ドイツとイタリアに留学。第85回日本音楽コンクール第3位受賞。五島記念文化賞オペラ新人賞受賞。新国立劇場「修道女アンジェリカ」ドルチーナ、「魔笛」侍女1等に出演。その他ヘンデル「メサイア」やバッハ「マタイ受難曲」、ラター「レクイエム」等宗教曲のソリストとして活躍。古楽アンサンブルアントネッロ「オルフェオ」ニンファに出演、バロックオペラのレパートリーの幅も広げている。2026年新国立劇場「こうもり」イーダ、「愛の妙薬」ジャンネッタに出演予定。



在 原 泉 ARIHARA Izumi / アリア (アルト)

弘前大学教育学部音楽科を経て、岩手大学大学院修士課程修了。声楽を渡邊一夫、小森輝彦、佐々木正利各氏に師事。日本声楽コンクール、大仙市大曲新人コンクール、東京国際声楽コンクールにおいて上位入賞を果たす。2012年、歌劇「さまよえるオランダ人」マリー役でデビュー以降、数多くのオペラ公演に出演、幅広い役柄を表現力に富んだ歌唱で演じ聴衆を魅了している。また、オペラだけにとどまらず、モーツァルト「レクイエム」、バッハのカンタータなどの宗教曲やベートーヴェン「第九」のソリストとしても、数々の著名な指揮者、オーケストラとの共演で活躍している。



我妻 健太 AZUMA Kenta / アリアと下僕 (テノール)

仙台市出身。玉川学園大学文学部外国語学科卒業。京都市立芸術大学声楽専攻卒業。放送大学大学院文化科学研究科修士課程修了(学術)。オペラでは「愛の妙薬」ネモリーノ、「ドン・ジョヴァンニ」ドン・オッターヴィオ、「トゥーランドット」パン等を演じる。ソリストとしては「メサイア」「口短調ミサ」モーツァルト作曲「レクイエム」「第九」等に出演。第1回伊勢志摩国際声楽コンクール第3位。第2回国際声楽コンクール東京グランプリ部門入選。日本声楽発声学会、日本ヴェルディ協会、宮城県芸術協会各会員、仙台宗教音楽合唱団パートリーダー。



及川 泰生 OIKAWA Taisei / アリア (バス)

岩手県出身。岩手大学教育学部を卒業後、東京藝術大学声楽科を経て、現在、同大学院声楽専攻3年次に在籍。第73回、74回藝大メサイア、藝大合唱定期ドヴォルザーク〈スターバト・マーテル〉、第41回台東第九公演にバスソリストとして出演。第100回二期会研修所コンサートに出演。これまでにグノー〈聖チェチーリアミサ〉やバッハのカンタータなどのソリストを務める。令和6年度福島育英会奨学生。盛岡バッハカンタータフェライン、日本声楽発声学会会員。声楽を小原一穂、佐々木正利、米谷毅彦、萩原潤の各氏に師事。



渡辺 修身 WATANABE Osami / 副指揮

北海道旭川市出身。国立音楽大学声楽科卒業後、桐朋学園大学オーケストラ研究生として指揮を学ぶ。声楽を益田道昭、指揮を岡部守弘、紙谷一衛、飯守泰次郎の各氏に師事。東京室内歌劇場等の各公演の副指揮者を務めた後、1993年渡独。アーヘン市立歌劇場にて音楽監督アシスタント、ライン・ドイツ・オペラ歌劇場にて合唱指揮者アシスタントを務めた。在独中、バッハ・アカデミー等のマスタークラスにて研鑽を積む。2001年帰国。現在、山形大学地域教育文化学部教授。山響アマデウスコア指揮者。日本音楽表現学会会員、日本声楽発声学会理事。

仙台宗教音楽アンサンブル / 管弦楽

第39回演奏会（2024年）に続き、第40回演奏会のために編成された特別アンサンブル。



神谷 未穂 KAMIYA Miho / コンサートミストレス (第1ヴァイオリン)

桐朋学園大学、ハノーファー国立音大、同大学ソリストクラスをそれぞれ首席卒業。パリ国立高等音楽院最高課程修了。

国内外のコンクール多数入賞。仙台フィル、千葉響コンサートマスター、宮城学院女子大学特命教授、音楽による復興センター・東北理事、デュオ・プリマ、アンサンブル・マレツラ、クワテュール・ディゼール、クアルテット・パトナ、仙台ジュニアオーケストラ講師、地域創造の協力アーティスト等で活動。宮城県芸術選奨受賞。

<https://www.mihokamiya.net>



ネストル・ロドリゲス Nestor Rodriguez / 第1ヴァイオリン

エルサルヴァドル（中米）生まれ。エルサルヴァドル国立芸術センター卒業後、1979年エルサルヴァドル国立交響楽団に入団。1981年、居を日本に移し、宮城フィルハーモニー管弦楽団（現 仙台フィルハーモニー管弦楽団）に入団。2024年3月仙台フィルを退団。

宮城フィルから仙台フィルへ変遷する中、すべての歴代指揮者と演奏を重ね、とりわけパスカル・ヴェロ氏との出会いは特別なものがあつた。第290回定期において、祖父の作品である交響詩『エル ヒボア』の日本初演を果たす。在団中より、室内楽において特に弦楽四重奏に力を入れている。



平松 典子 HIRAMATSU Noriko / 第1ヴァイオリン

仙台市出身。京都市立堀川高校音楽科、桐朋学園大学演奏学科卒業。

現在は、オーケストラの客演奏者を務めるほか、さまざまなコンサートに招かれ多くの演奏家と共演している。

また、アウトリーチや動物保護活動のためのチャリティーコンサートへの参加、後進の指導など地域に根差した活動も積極的に行っている。

宮城県芸術協会会員。



須藤 遥 SUDO Haruka / 第1ヴァイオリン

仙台市出身。4歳よりヴァイオリンを始める。常盤木学園高等学校音楽科を経て、京都市立芸術大学音楽学部を卒業。第51回卒業演奏会に出演。

第13回バッハホール音楽コンクール最優秀賞及びバッハホール音楽賞受賞。仙台ジュニアオーケストラに在籍し、卒団後ソリストとして共演。

これまでにヴァイオリンを 今野舞、長谷川康、藤川幸、小川有紀子、大谷玲子の各氏に、ヴィオラを小峰航一に師事。現在宮城県を拠点に、仙台フィルハーモニー管弦楽団エキストラ出演等幅広く活動している。



松山 古流 MATSUYAMA Koryu / 第1ヴァイオリン

福島県喜多方市出身。

東京音楽大学在学中より、新ヴィジュアルディ合奏団のViolin・Viola奏者として百回を超えるコンサートに出演。

今年3月まで、40年間 仙台フィルハーモニー管弦楽団で1st Violin奏者を務める傍ら、同楽団のメンバーと「カルテット・フィデス」を結成し、数多くのコンサートや復興支援の演奏活動を行なう。

仙台宗教音楽アンサンブル / 管弦楽

演



川 又 明日香 KAWAMATA Asuka / 第2ヴァイオリン

3歳からヴァイオリンを始める。桐朋女子高等学校音楽科、上野学園大学音楽学部を経て、ジュネーヴ州立高等音楽院修士課程ソリストコース修了に際し Maggy Breittmayer 賞を受賞。第2回仙台国際音楽コンクール審査委員特別賞。第37回茨城県新人賞受賞。

2019年11月NHK BSプレミアム「クラシック倶楽部（無言館・祈りI～戦後75年戦没画学生慰霊美術館から～）」に出演。

ヴァイオリンを原田幸一郎、矢部達哉、ミハエラ・マルティンの各氏に師事。

仙台フィルハーモニー管弦楽団第2ヴァイオリン首席奏者。



木 越 直 彦 KIGOSHI Naohiko / 第2ヴァイオリン

仙台市出身。桐朋学園大学音楽学部演奏学科卒業。

1981～83年、ドイツミュンヘン音楽大学に留学。これまでに、中塚 久、小林健次、久保田良作、ハインツ・エンドレスの各氏に師事。

1984年、仙台フィルハーモニー管弦楽団（当時宮城フィル）に入団。2022年3月末日、定年により退団。

ソリストとして、尚絅学院大学管弦楽団、ヒロムジカ・カンマー・オーケスター（青森県弘前市）、宮城教育大学交響楽団と、協奏曲等を共演。



浅 野 裕里香 ASANO Yurika / 第2ヴァイオリン

仙台市出身。桐朋女子高等学校音楽科を経て、桐朋学園大学音楽学部卒業。同大学研究科を修了。海外の国際音楽アカデミーに多数参加し、研鑽を積む。

2007年 バッハホール音楽コンクール最優秀賞。全日本芸術コンクール第2位。2012年 日本イタリア協会コンクール優勝。同年、Teatro Olimpico 国際フェスティバルをはじめ、イタリア各地で特別演奏会に出演し、好評を博す。

現在は、ソロ、室内楽、仙台フィルハーモニー管弦楽団に客演など、幅広く演奏活動を行っている。

昭和音楽大学附属音楽教室仙台校講師。宮城県芸術協会会員。



小 野 英 駿 ONO Hidetoshi / 第2ヴァイオリン

宮城県利府町出身。

5歳からバイオリンを始める。小学5年生から桐朋学園大学音楽学部附属子供のための音楽教室仙台教室に通い、常盤木学園高等学校音楽科卒業。桐朋学園音楽大学を経て特待生として奨学金を得て、洗足学園音楽大学入学、卒業。

在学中、安永徹氏の特別レッスンオーディションに合格、受講。

第19回全日本クラシック音楽コンクール第4位。

第14回バッハホールコンクール金賞受賞。

現在は東北地方を中心に、ソロ、室内楽、オーケストラなど幅広いジャンルで活動している。現在までにヴァイオリンを志賀恵子、木野雅之、澁谷由美子の各氏に、室内楽を川田知子、羽川真介、安永徹・市野あゆみの各氏に師事。

Fontana カルテットメンバー。



小畑 善昭 OBATA Yoshiaki / オーボエ

東京藝術大学音楽学部卒業。在学中の1973年毎日音楽コンクール（現日本音楽コンクール）管楽器部門第3位。同大学院音楽研究科オーボエ専攻修了。1979～82年まで東京交響楽団に在籍後、85年までベルリンに留学。1985～90年新日本フィルハーモニー交響楽団首席奏者を経て、90年に東京藝術大学助教授となり後進の指導にあたる。独奏・室内楽、また古楽器奏者としても演奏活動を繰り広げている。現在、東京藝術大学名誉教授。



岡 北斗 OKA Hokuto / オーボエ

愛知県立芸術大学卒業。東京藝術大学大学院修士課程修了。その後ベルリンへ留学。ベルリン国立歌劇場管弦楽団首席オーボエ奏者G. ヴィット氏に師事。ドイツ国立ロストック音楽・演劇大学にて国家演奏家資格を取得し帰国。藝大フィルハーモニア管弦楽団を経て現在、新日本フィルハーモニー交響楽団首席オーボエ奏者。横浜シンフォニエッタメンバー。愛知県立芸術大学及び桐朋学園大学非常勤講師。



阿部 博光 ABE Hiromitsu / フルート

東京藝術大学卒業。第45回日本音楽コンクールフルート部門入選。在学中に日本フィルハーモニー交響楽団へ入団。首席奏者を務める。1982年文化庁芸術家在外研修員として、スイスのバーゼル市に留学。P・L・グラーフ、R・メラーンの両氏に師事。1995年北海道教育大学岩見沢校に赴任。現在、北海道教育大学名誉教授。札幌大谷大学特任教授。これまでに札幌市民芸術祭大賞、札幌芸術賞を受賞。故小松昭五、細川順三、三村園子、故小泉剛、故吉田雅夫の各氏に師事。1997年HBCジュニアオーケストラ常任指揮者に就任。札幌フルート協会会長。日本フルート協会副会長。



櫻井 希 SAKURAI Nozomi / フルート

宮城教育大学音楽教育専攻を卒業。第155回日演連推薦新人演奏会において仙台フィルハーモニー管弦楽団と共演。第2回三田ユネスコフルートコンクール第2位（1位なし）及び三田市長賞受賞。第10回仙台フルートコンクール一般部門第1位。第20回浜松国際管楽器アカデミーにおいて、Best Performance Awardを受賞。平成27年度宮城県芸術選奨新人賞を受賞。現在、ヤマハミュージックジャパン・インストラクター、宮城県芸術協会会員、仙台フルート協会、各会員。



西口 真央 NISHIGUCHI Mao / ファゴット

東京藝術大学音楽学部器楽科を卒業。卒業時に同声会賞を受賞。桐朋オーケストラ・アカデミー修了。これまでにファゴットを井上俊次、岡崎耕治、岡本正之、神山純の各氏に師事。第2回K木管コンクールにてグランプリ第2位（1位なし）、及び大学生ファゴット部門第1位受賞。第2回ファゴットコンクール第1位受賞。第39回管打楽器コンクール第2位受賞。小澤征爾音楽塾オペラ・プロジェクトXVIに参加。同声会新人演奏会2020年に出演。仙台フィルハーモニー管弦楽団首席ファゴット奏者。

仙台宗教音楽アンサンブル / 管弦楽

演



成田 寛 NARITA Hiroshi / ヴィオラ

1986年に新日本フィルハーモニーに入団、約10年在籍。その間89年～90年、93年～94年の二度に渡りオランダのデン・ハーグ王立音楽院に留学、V.メンデルスゾーン氏に師事。またKISA弦楽四重奏団のメンバーとして95年～97年、秩父及びロンドンでの「アマデウス・クアルテット・セミナー」に定期的に参加しアマデウス・クアルテットのメンバーより薫陶を受け、ロンドン・ロイヤル・ポートレートギャラリーに於ける演奏会等に出演。その後、新星日本交響楽団の首席奏者に就任、合併後東京フィル首席奏者を2003年まで務めた。

現在は山形交響楽団契約首席を務める他、鈴木秀美、若松夏美、寺神戸亮、有田正広、L・コッポラ、S・ホッホランドの各氏等との室内楽での共演、楽遊会弦楽四重奏団やオーケストラ・リベラ・クラシカ、バッハ・コレギウム・ジャパン等のメンバーとして活動している。



梅田 昌子 UMEDA Masako / ヴィオラ

東京都立芸術高校音楽科卒業、東京藝術大学音楽学部器楽科ヴィオラ専攻卒業、同大学院修士課程修了。6歳よりヴァイオリンを奥田富士子、故兎東龍夫、海野義雄、各氏に師事。16歳よりヴィオラに転じ、岸優子、故浅妻文樹、各氏に師事。1982年同声会新人演奏会に出演。1985年石橋メモリアルホールにてソロリサイタルを催す。

1987年宮城フィルハーモニー管弦楽団(現・仙台フィル)に入団。1991年プラハに留学。チェコフィル首席ヴィオラ奏者 ヤロスラフ・モトリーク氏に師事。

1993年、2025年3月仙台にてソロリサイタルを催す。2025年3月仙台フィルハーモニー管弦楽団を退団。現在、宮城学院女子大学音楽科、仙台白百合学園小学校講師。



柴生田 桂子 SHIBOUTA Keiko / ヴィオラ

仙台市出身。桐朋学園付属女子高等学校音楽科より同大学を卒業。江藤俊哉氏に師事。その後ドイツ、デトモルト音楽大学に留学。

仙台フィルハーモニー、東京シティフィルハーモニー、スイス、リンツ・ブルックナーオーケストラなど内外のオーケストラと協演。

その他、ソロ、室内楽の演奏会を多数行っている。仙台を拠点に後進の指導にも意欲を示している。



(photo/A.Muto)

田崎 瑞博 TASAKI Mizuhiro / ヴィオラ・ダ・ガンバ

東京藝術大学卒。ヴァイオリンを桑田晶、兎東龍夫、山岡耕侖、外山滋に師事。チェロや各種古楽器を独学し、室内楽を中心に活躍。CDを多数リリース。

「古典四重奏団」チェロ奏者として、文化庁芸術祭大賞、ENEOS音楽賞奨励賞(旧モービル音楽賞)、「レコードアカデミー大賞」など各受賞。

「タブラトゥーラ」のフィーデル奏者として欧州などで公演。

アンサンブル「音楽三昧」の編曲者・ヴィオラ・チェロ奏者として「サライ大賞」受賞。



八島 珠子 YASHIMA Tamako / チェロ

福島市出身。福島女子高校入学と同時に同校管弦楽部でチェロを手にする。京都市立芸術大学音楽学部卒業。チェロを故・佐藤修、伊東毅、上村昇の各氏に師事。室内楽を岸邊百百雄、故・種田直之の各氏に師事。スロバキアにてヨーゼフ・ポドランスキーのレッスンを受ける。

現在仙台フィルハーモニー管弦楽団団員、宮城学院非常勤講師、仙台市ジュニアオーケストラ講師として活動するとともに、室内楽、ソロ、後進の指導の分野に於いても活動中。



三宅 進 MIYAKE Susumu / チェロ（通奏低音）

桐朋学園、米インディアナ大にて、安田謙一郎、木越洋、ヤーノシュ・シュタルケルの諸氏に師事。イソ弦楽四重奏団、新ヴィヴァルディ合奏団、群馬交響楽団首席を経て、現在 仙台フィルハーモニー管弦楽団ソロ首席奏者。全国主要オケへの首席客演、ソロ、室内楽、ヨーロッパ、アジア等海外での演奏も多い。武蔵野音楽大学で後進の指導にもあたる。仙台市宮城野区文化センター主催の室内楽シリーズ Music From PaToNa では音楽監督を務め、室内楽を仙台に根づかせた功績を高く評価されている。同シリーズはウィーン・フィル&サントリー音楽復興祈念賞を受賞。tbcラジオ「エンジョイ！クラシック」ではパーソナリティを務める。



田中 洸太郎 TANAKA Kotaro / コントラバス

北海道恵庭市出身。北海道教育大学札幌校音楽科卒業。桐朋学園大学音楽学部研究科を修了後に渡独、ライプツィヒ音楽演劇大学マスター課程で学ぶ。コントラバスを藤澤光雄、西田直文、Frithjof-Martin Grabner の各氏に師事。これまでに小澤征爾音楽塾に参加、桐朋オーケストラ・アカデミー研修課程を修了し、Carl Fresch Akademie Baden-Baden では奨励賞を受賞。現在は仙台フィルハーモニー管弦楽団コントラバス奏者として活動するほか、仙台ジュニアオーケストラの講師も務める。



渡辺 真理 WATANABE Mari / オルガン

宮城学院女子大学音楽科卒業。主にピアノを故 W.S. カンディフ、パイプオルガンを故伊澤長俊、佐藤ミサ子、伴奏法を金井紀子の各氏に師事。これまで多くの声楽家、合唱団と共演。また、山形交響楽団をはじめオーケストラの鍵盤奏者、通奏低音奏者としても各地で演奏活動をしている。東北学院大学、尚絅学院大学、日本基督教団仙台東一番丁教会礼拝オルガニスト。日本オルガン研究会、日本演奏連盟、宮城県芸術協会各会員。仙台宗教音楽合唱団練習ピアニスト。



平野 智美 HIRANO Tomomi / チェンバロ

東京藝術大学卒業、同大学院修了。文化庁芸術家在外研修員としてイギリスに派遣され研鑽を積む。第13回国際古楽コンクール＜山梨＞最高位受賞。演連コンサートにて、東京文化会館で室内楽リサイタルを開催。2005年文化庁ニューアーティストシリーズに選出される。ハイニヘン「新しい通奏低音奏法」翻訳書にて、リアリゼーションを担当するなど幅広く活動する。2016年～2018年国立音楽大学講師。現在、千葉経済大学短期大学部講師。CD「『1685』後期バロックの3巨匠 —スカルラッティ、ヘンデル、バッハ—」（音楽現代推薦盤）、「バッハ×ピアソラ」（レコード芸術準特選盤）リリース。

※チェンバロは、ハヤシチェンバロ製作所製を使用しています。



佐々木 正 利 SASAKI Masatoshi / 指揮者

東京藝術大学音楽学部声楽科卒業。同大学院修士課程^{指揮}及び博士後期課程修了。1980～82年デトモルト北西ドイツ音楽大学に学ぶ。

1973年バッハの福音史家で楽壇デビュー以来、国際的バッハ歌手として数々の大舞台に出演。1980年第6回ライプツィヒ国際バッハコンクール声楽部門第5位入賞。特に1980年ウィーン楽友協会でのマタイ受難曲や1985年ザルツブルグ音楽祭でのマニフィカト等^{指揮}は「世界最高のバッハ歌手の一人」と絶賛された。ライプツィヒ・ゲヴァントハ

ウス管弦楽団、ベルリン交響楽団、ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団、ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団、アムステルダム・フィルハーモニー管弦楽団、国立ブカレスト交響楽団、NHK交響楽団等、国内外のトップオーケストラと共演。ライプツィヒ聖トマス教会聖歌隊、シュトゥットガルト・ゲヒンゲン聖歌隊、ベルリン聖ヘドヴィッヒ聖歌隊、RIAS室内合唱団等、世界的合唱団のソリストを度々務め好評を博す。在独中ウェストファーレン州立歌劇場等で「コジ・ファン・トゥッテ」「フィデリオ」「グリゼルダ」等出演。

1970年東京藝術大学バッハ・カンタータ・クラブの創設に携わり指揮者としての活動を開始。以後50年以上に亘って主に宗教曲の演奏に冴えをみせ、特に世界的バッハ演奏家H. ヴィンシャーマン率いるドイツ・バッハゾリステンの演奏会では、ソリストとしてだけでなく自身が育てた合唱団も度々共演し、その歌唱力・合唱指導力によって絶大な信頼を勝ち得た。とりわけ盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、仙台宗教音楽合唱団、岡山バッハ・カンタータ協会等を率いての20数回に亘るドイツをはじめとする欧州公演では『シュッツ、バッハの世界的担い手』とした最大級の賛辞が新聞各紙に掲載された。1982年日本に戻ってから約40年間、多くの国際的歌手を育て上げ、また大学教授など多くの優れた指導者を輩出している。1987～88年には、H. リリング音楽監督のバッハ・アカデミーにて、テノール マスタークラスの講師を務め、またコダーイ・サマースクールや古楽サマースクール等でも指導講師に招かれるなど、その指導力についても世界的に定評がある。1994年長年にわたる顕著な演奏・教育の業績に対し、第47回岩手日報文化賞が贈られ、また2011年には日独交流150周年を記念してドイツ大使館より日独友好賞（功労賞）が贈られた。2024年6月には世界の著名なバッハ演奏家たちがバッハ演奏を繰り広げるライプツィヒ・バッハ音楽祭に招かれ、バッハ・カンタータ・フェライン東日本（盛岡・仙台・山形の合唱団有志で組織）を率いて、カンタータ3曲を演奏、世界から絶賛された。

現在、岩手大学名誉教授。日本声楽発声学会会長他、複数の学会の要職を務める。二期会会員、バッハ・バロック研究会講師。盛岡バッハ・カンタータ・フェライン、仙台宗教音楽合唱団、岡山バッハカンタータ協会、東京21合唱団、佐々木正利バッハコア、バッハ・アンサンブル富山の各指揮者。山響アマデウスコア、豊中市民第九合唱団の各音楽監督。熊友会ヴォーカル・アンサンブル代表。



『マタイに向けての試金石』



佐々木 正 利

皆さま、仙台宗教音楽合唱団（以下、「宗音」と略）第40回演奏会『ヨハネ受難曲演奏会』にお越しくださいませ心より御礼申し上げます。指揮者の佐々木正利です。

思えば5年前、私たちは『東北3都市 マタイ受難曲 特別演奏会』と銘打って、2020年の5月4、5、6日に山形、仙台、盛岡と三日連続のマタイ公演を企画し、総力を上げて取り組んでいたものでした。それが世界的な未曾有の災禍「コロナ禍」に見舞われまして、無念の中止に追い込まれてしまいました。時の移り変わりは早いもので、あれからもう5年も経過してしまいました。しかし、私たちのマタイ上演に掛ける想いはそれこそ半端なものではなく、いつの日か必ず復活上演したいものと虎視眈々と機会を窺い、安易に挫けることなく、気持ちを繋ぎ活動を継続してきました。

とは申しても、さすがにマタイは大曲です。演奏者の編成を見ても、二つのフルオーケストラと二つの合唱（独立したコラルパートを加えてトータル9声部）、最低でも7人のソリストが必要です。余談になりますが、私たちと同様に5年前にマタイ上演を目指していて頓挫せざるを得なかった、佐々木バッハセミナー記念合唱団は、来年2026年3月15日に（於：東京すみだトリフォニーホール）名前を佐々木正利バッハコアと変えて復活公演する運びとなりましたが、そこでは何と12人のソリストを起用します。

これほどの規模で、演奏時間もトータルで優に3時間を超えるものもありますので、世の中の数多くの合唱団同様、ご多分に洩れずコロナ禍で団員数が激減した宗音でしたから、おいそれと復活公演にたどり着くこと能わず、しかしながらそれでも簡単に諦めることなく、佐々木のアイデアと団員の努力を結集して、無聴衆を覚悟の上で、つなぎの楽曲上演を三回に分けて敢行してきました。それでは、そのつなぎ楽曲とは何かを以下に簡単にご紹介いたしましょう。

佐々木のアイデアとはこういったものです。基本コンセプトは次の6点（順不同）でした。

1. イエス・キリストの受難の記事による受難曲であること
2. 使用楽曲は全てバッハのオリジナル曲とすること
3. マタイ伝に沿ったストーリー展開にできるだけ寄り添うこと
4. マタイより楽曲規模（編成、時間等々）が小さいこと
5. 演奏に当たってはソロも団員（含：姉妹団体構成員）で担うこと
6. 伴奏は鍵盤楽器（ピアノ＋オルガン）のみとすること

このコンセプトに添い、佐々木が編纂したのは、残念ながら完全な形としては残存していないバッハの受難曲「マルコ受難曲」（1731年、H.グリシュカート校訂版）をベースに、歌詞のみで音楽が抜け落ちている楽曲（聖書朗読）を、マタイ受難曲の同じ記事の箇所を宛てがい、繋ぎとしてバッハのコラル集から引用し埋め合わせた、苦肉のオリジナル労作「マルコタイ受難曲」なるものです。

マルコ受難曲（Markus-Passion BWV247）＋ マタイ受難曲（Matthäus-Passion BWV244）

＝ マルコタイ受難曲（Markttäus-Passion BWV245.5）

何とも姑息な？～ オリジナル楽譜販売中！?



揮

もう、次に日の目を見ることはないと思われるこの曲ですが、バッハのマルコ受難曲に収められた素晴らしい合唱曲と珠玉のアリア数曲を、同時にマタイ受難曲のそれらと一挙に聴くことができる訳ですから、一度お聴きになってみたいと思われませんか。

こうして2022年度中に斬新な試みを遂行した私たちは、意を決して6年ぶりの単独演奏会に臨むべく昨年4月にカンタータ2曲（BWV4、93）を中心としたプログラムで演奏会を催しました。実はこの演奏会で私は喜びと共に、望外の収穫を得られたのです。

メ

その一つは、仙台フィルのメンバーの皆さまを中心に編成したオーケストラが、とりわけバロック音楽に精通しておられたことです。プロのプレーヤーを前にして口幅ったいことを申すようで恐縮ですが、私が宗音の指揮者に就任（1982年）して間もない頃、やはりバッハのカンタータを演奏したのですが、当時の宮城フィルを含むメンバーの方々はバッハやバロックの様式にはまだ慣れていらっしやらず、フレージングやアーティキュレーションのみならずボーイングやタンギングまで指示させていただかねばならなかったのです。これは歌に置き換えるとわかりやすいと思いますが、指揮者が歌い手の発声法にまで関わらねばならない事態は本当に悩ましいものがあるわけでした、それが昨年の皆さまは全く手がかからず、正に隔世の感ありといった感慨を持ちました。

二つ目は、私たち宗音は今年で創団58年と、あと少しで還暦を迎えますが、宗音のFacebookに2017年盛岡バッハ・カンタータ・フェライン元会員の赤塚貴史さんがこうした投稿をされています。「(前略) それにしてもメンバーの出入り・増減を乗り越え、半世紀も活動を継続させるというのは本当に大変なこと。団そのものへの愛情と活動への強い意欲をもった縁の下での力持ちがいないとなかなか困難なことです。敬意を表します」と。私も全く同感です。と申しますのも、コロナ禍の筆舌に尽くし難い厳しい環境を乗り越えて頑張ってきた団員の皆さんへのご褒美に、神さまは素晴らしいプレゼントを用意してくださったのでした。それは10年近くも団から足が遠ざかっていた古き仲間たちの復団です。その復活メンバーの一人おひとりが、それぞれの時に共に汗して素晴らしい音楽を享受し分かち合った至福の時の担い手として心に強く残っています。

そして最後に、私ごととなりますが、この40年以上、教え育ててきた弟子たちが代わる代わる宗音のステージを経験させていただき、成長の糧を得て世界へ羽ばたいてまいりました。昨年の藤原優花や及川泰生は、今や日本を代表する若手のホープと目され、在原泉と西野真史は東北の田舎に住みながら、中堅どころとして安定した歌唱により信頼を勝ち得ています。

さて、私たちは昨年6月に、ドイツはバッハの聖地ライプツィヒにおける『バッハ音楽祭』に、世界中の優れたバッハ演奏家と共に招かれ、盛岡、山形、仙台の仲間たちと「バッハ・カンタータ・フェライン東日本」と銘打って、現地の指揮者、ソリスト、オーケストラとカンタータ3曲（BWV10、93、177）を演奏し好評を博しました。その折、マルクト広場での野外ステージでは、ヨハネ受難曲（1749年総譜版）が手話、パントマイム付きで演奏され、私たちは石畳に体育座りで耳を傾け、オペラさながらの迫真のイエスの捕縛場面に衝撃を受けました。



バッハはこのヨハネ受難曲を生前4度にわたって書き換えしています。それは、自作品の不完全さに得心がいかなかったからというより、キリスト教教義の中心であるイエス・キリストの十字架の死（受難）と復活という人類の罪の贖い（救いの奥義）を、それと相対する群衆の激しい憎悪を合唱曲としてドラマティックに表現する構成を前後に配し、それを繰り返し提示することによって、何度も示し続けたかったからなのではないでしょうか。

この奥義の中心コラール No.22「神の御子よ、あなたが囚われたことにより私たちは自由を得ることができた。（中略）あなたが囚われの身になって下さらなかったら、私たちは永遠に奴隷の身だったでしょう。」の直前に、ピラトはイエスを釈放しようと努めた（第19章12節）と記されています。このコラール以前では、ピラトはイエスに興味を持ち彼と対話はするものの、何ら罪を認めることができず彼を釈放しようとしています。一転してコラール後は、群衆に押されて釈放を断念せざるを得ない状況に追い込まれていきます。バッハは明らかに、群衆がピラトをして処刑せざるを得ない状況に追い込んでいく過程を、この受難曲全体のクライマックスと捉えていたということではないでしょうか。

このヨハネ受難曲では曲が始まるとともにいきなりイエスの捕縛の場面が登場します。そのため、聴く者にとっては最初から高い緊張が強いられます。また、合唱が占める割合がとても高いことがヨハネの特徴の一つになっています。この合唱は、聖書の言葉が語られる部分では群衆の役割を担い、クライマックスにおけるそのテンポの速い対位的な歌声は、最早ピラトにしては抑制の効かない興奮した状況を醸し出し、一転してコラールは、この場면을聴いている会衆に自然と湧き出してくる信仰心の発露として心に染み入ってきます。

第2部が始まってから、イエスの埋葬に至るまでの一連のドラマは、マタイ受難曲でも同じような流れに沿って描写されていきますが、ヨハネはアリアが少なく、福音史家（伊藤陽平）- イエス（田中雅史）- ピラト（鈴木集）- 群衆（合唱）の掛け合いを中心として進んでいきますので、より緊密な展開が繰り返られていくのです。

今回、この部分の配役はみな初めて歌う者たちです。果たして、どれほど劇的に表現できるか。ペテロ & アリア（B）：荒井渉吾、端女 & アリア（S）：今野沙知恵、下僕 & アリア（T）：我妻健太、アリア（A）：在原泉、アリア（B）：及川泰生も併せて全員、初挑戦です。果たして、私の起用（抜擢）が吉と出るか、凶と出るか。ある意味では、私にとっても試金石です。

よ～し！期待と希望を持ってタクトを下ろすことにしましょう。なぜって、次はマタイが控えているからです。それまでは死ねません。

本日のアンコール、ヨハネ受難曲（1749年総譜版）No.40.Choral “Ach Herr, laß dein lieb Engelein” を長年私たちを導いてくださった天国の故中井祐之先生に捧げます。

2025年、4月26日記す

盛岡バッハ・カンタータ・フェライン / 合同合唱



1977年に「J.S. バッハの教会カンタータの研究と演奏を通して音楽芸術を追求する」ことを目的に結成された。

当初より佐々木正利氏を指揮者として迎え、バッハの音楽の真髄に触れる活動を目指して多くの演奏会を行ってきた。ヨハネ受難曲は1985年、2007年、2017年に演奏しているが、第二稿の演奏は今回が初めてとなる。

これまでの演奏会では、客演指揮者としてH. ヴィンシャーマン、G. シュマルフス、D. ティム、K. マズア、H. リリング、D. エッティンガー、H. シェレンベルガー、H.J. ロッチュ、

岩城宏之、飯森範親などを迎え、バッハからマーラーまで幅広い曲目を演奏してきた。また、現在までドイツへの演奏旅行を6回行い現地で高い評価を得ている。直近では、2024年6月にバッハ・アルヒーフの招待でドイツ、ライブツィヒで開催されたバッハ音楽祭への出演を果たした。

指揮者 佐々木 正利
ピアニスト 菊池 玲子
コンサートマスター 小原 一穂
佐々木 幹雄
コンサートミストレス 小川 暁美

代表 茂木 容子
副代表 佐藤 和久
副代表 遠山 宜哉



ホームページ:

<https://mbkverein.info/>

約50年間の演奏履歴を掲載しております

ソプラノ	アルト	テノール	バス
赤塚 温子	在原 泉	加藤 進也	市川 聖也
岡野美映子	小川 暁美	佐々木幹雄	宇津野智成
小原 育世	金子 千鶴	武田 宏	及川 泰生
川嶋 容子	黒森 美里	中野 奏保	小原 一穂
熊谷 充代	千葉ゆつき	西野 真史	高橋 聡
昆 千晶	続石真奈美	吉谷地勝久	遠山 宜哉
斉藤 純子	茂木 容子		芳賀 郁夫
佐々木恵子			
外崎 麻子			
藤原 弘子			
真下 祐子			
八木 絵未			
吉田真弥子			

きまち往診クリニック
院長 佐々木 潔子
お問い合わせ
☎ 022-725-3815
相談受付時間 平日16:00～18:00
〒981-0932 仙台市青葉区木町2番7号 105
FAX 022-725-3816
きまち往診クリニック 検索

生活を支える きまち往診クリニック

在宅医療とは？ 通院困難な方に、訪問診療を行います。豊富な経験を持つ医師が、きめ細かな医療を提供いたします。

- 01 ご自宅やご入居先で診療が受けられるので、通院の必要がありません。
- 02 かかりつけ医として、意見書や同意書、診断書を作成いたします。
- 03 処方薬をお届けしてくれる薬局さんを紹介いたします。
- 04 病院、訪問看護などの医療・介護サービスと連携し、在宅生活をサポートいたします。



仙台宗教音楽合唱団



1967年創団。J.S. バッハや H. シュッツなどのドイツ・バロック期の宗教合唱曲の演奏を中心に活動してきた。1982年以降、佐々木正利氏を指揮者に迎え、バッハの「ヨハネ受難曲」「マタイ受難曲」「ロ短調ミサ曲」「クリスマス・オラトリオ」などの演奏を完遂。近年は、フォーレ、ブラームス、デュルフレ、ラター、イエイロといった近現代の宗教曲までレパートリーを広げている。また2013年より10年間、「3・11祈りのコンサート」の活動に参加し、毎年3月11日にモーツアルトの「レクイエム」の演奏を捧げてきた。2018年8月の第38回演奏会開催後、

2020年5月の「マタイ受難曲」特別演奏会に向けて準備を重ねてきたが、コロナ禍に見舞われ演奏会開催を断念。昨年、6年ぶりの主催演奏会を開催。「作品の本質に迫るためには“歌詞の深い表現とそこに込められたメッセージへの共感”を十全に表現することが大切であり、そのためにはまず“正確な発音・訓練された発声”と“正しい様式感”が不可欠である」という佐々木正利氏の指導のもと、様々なバックグラウンドを持つ団員が集まり、毎週練習を重ねている。

指揮者 佐々木 正利
ピアニスト 渡辺 真理
ヴォイストレーナー 佐々木まり子
中野 寛司
コンサートミストレス 鈴木 英美

委員長 北岡 倫典
副委員長 水戸 由貴子
副委員長 河原 清

今回の演奏会に際し、
助成金を賜りました。
下記3団体に厚く御礼を申し上げます。

公財) 三菱 UFJ 信託地域文化財団
公財) 宮城県文化振興財団
公財) 仙台市市民文化事業団

チラシ・ポスターデザイン 河原 清
チラシ・ポスター・プログラム製作
(株)宮城文化協会

ソプラノ	アルト	テノール	バス
◎ 飯淵 正子	飯田眞佐子	◎ 我妻 健太	飯田 若芳
石澤 悦子	伊藤 明子	伊藤 竜一	○ 石川 賢
石澤 信子	○ 植松 智穂	及川 克行	佐久間良樹
大友 利恵	大場 啓子	岡本 敏男	穴戸多加志
小高わか奈	小笠原香澄	河原 清	杉井 智一
小林 澄子	小坂 洋子	北岡 倫典	◎ 鈴木 孝裕
小平 慶子	○ 今野 早苗	北田 真吾	武田 宏之
近藤 順子	佐々木潔子	鈴木 博文	田村 高幸
後藤 直子	佐々木美智子	高瀬 重嗣	山岸 健一
高瀬 朋子	穴戸千佳子	○ 中村 洋	♪ 渡辺 修身
○ 高瀬 佳子	柴田 映子	渡邊 伸作	渡辺 信之
♪ 田口 優実	下永恵美子		
竹内 望	杉井 知子		
圓谷 範子	鈴鴨よしみ		
中尾 真枝	◎ 鈴木 英美	ステージマネージャー	田澤 隆
中村 佳世	武田 匡子	字幕 まくうち	上野 詩織
中村 理恵	田村 淑子	スイッチャー	♪ 菅原 美穂
新妻 令子	沼倉 るみ	歌詞 対 訳	山岸 健一
福田 良子	畠山三枝子		
増田 明子	丸子 智子		
三浦 香苗	水戸由貴子		
本良いよ子	八尾 敦子		
○ 山室ふさ子	柳父かほる		
	矢野 道子		
	山岸 美紗		

◎ パートリーダー
○ サブ・パートリーダー
♪ 山響アマデウスコー



1967年06月	佐藤泰平氏により宗教音楽研究会合唱団として発足			
1973年01月	第1回演奏会	於 / 医師会館	バッハ「カンタータ4番」他	指揮：佐藤泰平
1974年03月	第2回演奏会	於 / 市民会館	バッハ「マタイ受難曲」第1部	指揮：佐藤泰平
1975年03月	第3回演奏会	於 / 電力ホール	バッハ「マタイ受難曲」全曲	指揮：佐藤泰平
1976年03月	第4回演奏会	於 / 電力ホール	バッハ「モテット3番カンタータ106、147番」	指揮：H. リリング
1979年03月	第6回演奏会	於 / 電力ホール	バッハ「カンタータ21番」他	指揮：小林道夫
1983年03月	第10回演奏会	於 / 電力ホール	バッハ「小ミサ曲ト短調、カンタータ132番」他	指揮：佐々木正利
1985年03月	第12回演奏会	於 / 市民会館	バッハ「ヨハネ受難曲」	指揮：佐々木正利
1986年05月	第2回トイ演奏旅行		ベテル「メサイア」、バッハ「モテット1番」他	指揮：佐々木正利
1988年03月	第14回演奏会	於 / 市民会館	バッハ「ミサ曲口短調」	指揮：佐々木正利
1990年01月	第3回トイ演奏旅行		バッハ「クリスマスオラトリオ(4～6部)」他	指揮：佐々木正利
1991年03月	第16回演奏会	於 / 青年文化センター	バッハ「モテット1番、2番」他	指揮：佐々木正利
1992年10月	第17回演奏会	於 / 青年文化センター	バッハ「カンタータ106番」他	指揮：佐々木正利
1993年10月	特別演奏会	於 / 青年文化センター	バッハ「マタイ受難曲」	指揮：H. ヴェンジャーマン
1994年10月	第18回演奏会	於 / 青年文化センター	バッハ「カンタータ8、17、198番」他	指揮：佐々木正利
1998年11月	第22回演奏会	於 / 電力ホール	バッハ「ミサ曲口短調」	指揮：H. ヴェンジャーマン
2000年09月	第24回演奏会	於 / 青年文化センター	バッハ「カンタータ146、169番」他	指揮：佐々木正利
2002年02月	第25回演奏会	於 / 青年文化センター	バッハ「ヨハネ受難曲」	指揮：佐々木正利
2002年10月	第26回演奏会	於 / 青年文化センター	バッハ「小ミサ曲イ長調、カンタータ45番」他	指揮：D. ティム
2003年06月	第27回演奏会	於 / 青年文化センター	バッハ「モテット4番、6番」他	指揮：佐々木正利
2004年08月	第5回トイ演奏旅行		バッハ「カンタータ131、21番」	指揮：D. ティム
2004年11月	第28回演奏会	於 / 青年文化センター	バッハ「カンタータ131、71、155、21番」他	指揮：佐々木正利
2006年12月	第30回演奏会	於 / 青年文化センター	バッハ「クリスマスオラトリオ」(全曲)	指揮：佐々木正利
2007年12月	台湾演奏旅行に参加		バッハ「クリスマスオラトリオ」(1～3部)	指揮：G. シュマルルス
2010年01月	OEK 仙台公演	於 / 東北大川内萩ホール	バッハ「ミサ曲口短調」	指揮：H. リリング
2013年08月	第6回トイ演奏旅行		バッハ「カンタータ46番、102番、105番」他	指揮：D. ティム
2017年07月	第37回演奏会	於 / 東北大川内萩ホール	バッハ「マニフィカト、カンタータ79番」他	指揮：佐々木正利
2020年05月	特別演奏会(中止)	於 / 東北大川内萩ホール	バッハ「マタイ受難曲」	指揮：佐々木正利
2022年07&12月	レクチャーコンサート	於 / エルバーク仙台	バッハ「マルコ受難曲(佐々木編纂版)」	指揮：佐々木正利
2023年11月	メモリアルコンサート	東京、盛岡公演参加	バッハ「カンタータ27、93、140番」	指揮：佐々木正利
2024年04月	第39回演奏会	於 / 日立システムズホール	バッハ「カンタータ93、4番」他	指揮：佐々木正利

※過去58年間の演奏会から、バッハの演奏をピックアップして掲載しました

団員募集

私たちの合唱団は、指揮者の佐々木正利氏（岩手大学教育学部名誉教授、声楽家、二期会会員）の指導のもと、西洋の宗教合唱曲の演奏を中心に活動している一般合唱団です。次回の第41回演奏会は、2026年の開催を目標に、ロッシーニの「小荘厳ミサ曲」と「O saltaris Hostia」、マーク・ヘイズの宗教曲集の練習に取り組む予定です。合唱好きな方を歓迎します！お気軽に見学においで下さい♪

練習日 毎週木曜日 18:30～20:30頃 仙台ハリストス正教会 信徒館4階

強化練習 月1回 日曜日 or 祝日 13:15～16:30頃 市民センター他

○強化練習予定日 2025年5/11, 6/15, 7/13, 8/24 他未定

入団費 一般：2,000円 / 29歳以下：1,000円 / 学生：無料

月額団費 一般：5,000円または4,000円 / 29歳以下：3,000円 / 学生：1,000円 ※家族割引もあります

楽譜代は実費です。合宿経費は別途集金します。なお主催演奏会の参加者には、チケット販売と参加費の負担があります。

連絡先 E-mail: shuon.inq@gmail.com (大友)

宗音ホームページ: <http://classic.music.coocan.jp/cgms/>

宗音フェイスブック: <https://www.facebook.com/Sendai.shyuon>



[主催] 仙台宗教音楽合唱団

[後援] 宮城県教育委員会 (公財)仙台市市民文化事業団

 河北新報社 **NHK** 仙台放送局 **TBC** 東北放送

[助成] (公財)三菱UFJ信託地域文化財団

(公財)宮城県文化振興財団 (公財)仙台市市民文化事業団

——
Geistlichemusik Chor Sendai
Seit 1967
——